

宮城県学校生活協同組合組織部長
みやぎ生活協同組合理事

高橋 多賀子

学校生協再建を支え、 家庭班活動の先駆けとなる

【たかはし たかこ】

-
- 1925(大正14)年 12月23日、遠田郡涌谷町に生まれる
1944(昭和19)年 宮城県女子専門学校を繰り上げ卒業
1946(昭和21)年 涌谷小学校(現涌谷第一小学校)
に奉職
1947(昭和22)年 涌谷中学校に転任
1953(昭和28)年 宮城県学校生活協同組合に奉職
1982(昭和57)年 みやぎ生活協同組合理事
2006(平成18)年 6月16日死去

人生の分岐点を超えて学校生協職員に

寒い日だった。平均気温零度、白い息が闇に流れて消えた。一九四七（昭和二二）年午後九時一五分、NHKラジオから「二・一ゼネスト」中止を伝える声が流れてきた。国鉄職員をはじめとする労働者四二万人の首切りの撤回、平均賃上げ要求などを掲げ計画していた二月一日のゼネラルストライキが頓挫したのだった。

涌谷中学校の教員だった高橋多賀子はこの日のことを後年『宮教組物語 あしあと・40年』に綴っている。

―二・一ストは中止になりました。凍てついた道を泣きながら帰ったあの夜のこと
は、やはり今も深い記憶の中であざやかに思い出される場面です。―

先輩教員たちと一緒に起こした行動であり、大勢の父兄の支援も受けていた。「この小さな町で取り組んだ二・一ストの闘いが私を変えました」と言うように、この体験は人生の分岐点となった。

多賀子は当時、中学一年生を受け持ち、バレー部で生徒とともに汗を流す日を送っていた。まだ二一歳。さぞ澁刺とした教員だったことだろう。

だがその生活はレッドパージで断ち切られる。昭和二四年九月退職勧告、宮城県教員組合の臨時大会が開かれるが救援の手は伸びず、多賀子は複雑な思いを抱えながら一二月一日、職を退いた。

戦後間もない時期、食べることに精一杯なのは多賀子も同じだった。ひかり書房という小さな書店で本の配達をしながら多賀子は細々とその日を暮らす。教員を辞めてから三年が過ぎたある日、多賀子は街で懐かしい人から声をかけられた。「多賀ちゃん、いま何をしているんだ?」。先輩教員の木下義一だった。木下は当時、宮城県学校生活協同組合（以下学校生協）の専務理事を務め、経営危機に陥った学校生協の再建を目指していた。「良ければ仕事を手伝ってくれないか」と言う。「思想は関係ないよ。いい仕事をしてもらえばいい」。

木下の温かい言葉が嬉しく胸に響いた。

四面楚歌のもとで受け取った温かい励まし

当時、学校生協は一二〇〇万円の赤字を出し、「武士の商法」と叩かれていた。そこへ転職するのだ。給料が安く仕事が大変なことは覚悟の上だった。昭和二八年五月一日、多賀子は再建を目指す学校生協に自分の場所を見つけ、新たな道を歩み始める。最初の仕事は倉庫に山と積まれた不良在庫の処理だった。一円の得にもならないばかりか逆に処分費用がかかる商品の山は赤字の象徴に見えたことだろう。暗澹たる思いに捉われながら、多賀子はひたむきに仕事をこなしていった。

経営危機の責任は前の執行部にあるのだが、批判の眼は多賀子たち職員にも向けら

れた。学校生協に対する不信任は根強く、営業に行っても職員室に入れてもらえず玄関払いされた。四面楚歌という言葉を噛みしめる日々だった。

それでも、協同の火は消せない」と木下や理事を務める学校長たちが「組合員一人当たり四〇〇円の再建協力金」と利用結集の再建案を掲げて立ち上がると、徐々に応援の輪が広がるようになった。多賀子たち職員は利用拡大を目指し、巡回車に学用品や教員向けの生活用品を積んで県内の学校を営業して歩いた。供給目標を達成したことが分かると拍手が起き、ときにはお茶と餅菓子で乾杯した。

こんなこともあった。

「学校の教材を注文したいから誰か来るように」と志津川の中学校校長から連絡があり、多賀子が赴いた。朝六時半のバスで出発し五時間ほどかけて着くと大層親切にされた上、「一年分の理科教材を発注するから、頼むよ」と四五万円もの大金を渡された。見たこともないような大金に驚き、ただただ落とさないようにとお金を抱えて事務所に戻った。

多賀子はそのときの心境をこう話している。

「こういう人が世のなかにはいるんだなあと、本当に感激しました。生協だから注文するよ、という方たちがいっぱいいらっしゃいました。そういうことで再建の道を踏み出したのです」

組合員の暮らしと健康、平和を守る役割を果たそう

供給高のほかに多賀子たちが懸命に取り組んだのは利用代金の回収だった。営業職員から「何百万、何十万の代金を回収できました」と報告があり、金額が大きいとみんなで拍手した。「これで今月は給与の遅配がないだろう」という安堵感からだった。徐々に再建の光は見え始めていたが、台所が火の車であることに変わりはなく、最初二一日支給だった給与は二五日になり二八日に遅れるようになってきていた。学校生協再建のため歯を食いしばって頑張っているが、限界がある。採用の時期によってまちまちだった給与条件の改善や超過勤務手当などの問題も山積していた。

「組合員の暮らしを守るために、職員の暮らしが犠牲になるのはおかしい」
労働組合結成の声が自然と沸き起こり、昭和三三年、学校生協の労働組合が誕生した。執行委員長には後輩の蘓武昌春、書記長に多賀子が就き、ガリ版刷りの機関誌『にじ』を発刊した。

「生協は、組合員である先生方に出資していただいて運営ができる。剰余金は組合員のものであり、私たち職員はそれに奉仕する立場なんだ。生協の主人公は組合員。私たちは組合員の暮らしと健康、平和を守る役割をきちんと果たそう」

そんな思いを込めて、「不正・不勉強・不親切をなくし、組合員から信頼される従業員となろう」という方針を掲げた。

多賀子はどんなときもはつきりと自分の意見を述べた。職員の行動に問題があれば、遠慮なく指摘した。経営委員会で白熱する議論の多くは多賀子の発言や問題提起が呼び起こしたものだ。多人数決で決めても「私は反対だったということ」を記録しておいてください」と念を押した。しかし議論が終われば執着を捨て、颯爽と職員の先頭に立って活動した。

「私たちはとんでもない間違いを起こすところだった」

木下専務理事の信頼を得ていた多賀子は、全国で開催される研修会によく出ていた。日本生活協同組合連合会（以下日本生協連）の「婦人活動家会議」もそのひとつだ。多賀子の研修報告を聞いた蕪武は、学校生協に入ったばかりということもあって目を啓かれる思いをした。

『職域生協』である学校生協は、組合員は学校の教職員、理事の多くは校長である。ところが他生協では、地域の主婦が活動の中心で、理事も女性が多いという。それは、消費者主導の地域生協が生協運動の本流になっていることを意味していた。

その後も多賀子は、日本生協連で活動する女性たちや消費者生協として日本の生協運動をリードする灘神戸の人たちとの交流を通じて、貪欲に知識を吸収していく。

木下専務理事から「地域化」の方針が示され、石巻に新店することになったのはそ

んなどきだった。

学校生協と地域生協のあいだには大きな隔たりがあることを多賀子はふだんの学習で実感していた。一度しっかりと消費者生協の店舗事業を見ておかなければと考え、昭和三〇年に誕生した鶴岡生協（現生協共立社）へ研修に行った。

そこで多賀子は漠然と抱いていた不安の正体に突き当たる。

学校生協が供給しているものは学用品や教職員向けの生活用品だ。しかし鶴岡生協の店舗には野菜などの生鮮品が並んでいた。取扱う商品が違うのだ。学校生協が計画している店舗には生鮮を扱うという発想がまったくなかったことに気付き、多賀子は「いまのままではダメだ。私たちはとんでもない間違いを起こすところだった」と、同行していた蕪武と顔を見合わせた。

しかし学校生協が生鮮品を扱うことはすぐには難しい。そこで食品は缶詰や菓子など日持ちの良い食品から扱いを始めることにした。靴下や肌着、化粧品、洗剤など地域住民の要望に添うであろう雑貨を揃えるようにした。

こうして昭和三四年四月二六日、石巻に学校生協の一号店「石巻分配所 生協ストアー」が開店した。店はセルフサービス方式で入り口に二〇個ほどの買い物カゴを置き、レジスターを一台設置した。店舗での供給のほか、店にある缶詰、乾麺、毛布カバー、シーツなどを車に積んで学校への巡回も行なった。

家庭班を中心に広がった組合員活動

鶴岡生協で多賀子が学んできたものに「家庭班」があった。鶴岡生協も最初につくった店舗は小さかったが、そこに組合員が結集して事業を支えていた。その仕組みが家庭班だった。

石巻分配所はなかなか供給高が伸びず、厳しい経営を強いられていた。多賀子は店舗周辺の住民を組合員にして家庭班をつくることを提案。石巻分配所が市内穀町に移転するのを機に石巻と仙台で家庭班づくりを進め、班会や組合員拡大活動に取り組み始めた。記録では昭和三七年三月から活動開始とあり、宮城県内の家庭班活動に多賀子が先駆的な役割を果たしたことが分かる。

こうして石巻に一八班、仙台に一五班の家庭班が誕生し、学校生協の地域化は家庭班を中心にした組合員の力で成し遂げられていくことになる。

組合員が増えた石巻分配所も、赤字店から繁盛店へと変身することができた。穀町の石巻分配所で店長を務めた笠原信三は、その理由を青果の市場仕入れや競合店対策とともに「毎月の班長会や班会での意見、要望に真剣に取り組み、商品や売り場の改善につなげたことが最も大きな要因であったと思っています」と語っている。

昭和四一年に石巻駅前へ店舗を移転したあとは、家庭班で牛乳の共同購入を開始。多賀子は翌年の総代会議案書に「石巻の家庭班で醤油の味覚テストを行ない生協醤油

の開発と共同購入を開始する」「家計簿記入活動を開始する」計画を明記する。

生協醤油の開発は地元の味噌醤油醸造店・毛利屋に委託し、組合員の味覚テストを経て製品化された。家計簿は全国の地域生協を担う女性たちと連携しながら活動を進めた。組合員と一緒に、梅干しや食肉など角田との産直活動にも取り組んだ。石巻駅前店では、家庭班員の全国消費者大会参加、家計簿・商品研究・手芸のグループの発足など家庭班を中心に組合員活動の輪が広がっていった。すべて多賀子の発想と行動力の成せる業だった。

昭和五七年、学校生協は宮城県民生協と合併しみやぎ生協が設立される。多賀子は生協を退職し、地域担当理事として後進の活動を支えることにした。

蘓武たちは気性のさっぱりした多賀子を「お多賀さん」と呼んだり、ときにはふざけて「タカオさん」と呼んだりした。あまり飲める口ではないのに給料をもらうと「飲みに行こう」と後輩を誘って中心街のバーに繰り出した。職員旅行では童謡の『月の砂漠』を唄いながら踊り、休憩時間には同僚とともに事務所の前でバレーボールに打ち興じた。「あの人が言うなら間違いない」と誰からも信頼されていた。

子どもたちから先生と呼ばれていた時代より、はるかに長い時間を「多賀子さん」と頼られて生きてきた。享年八〇歳。本人の遺志で葬儀は行わず、戒名もつけず、家族や親しい人々に見送られ旅立った。

※屏写真提供／荒川節子